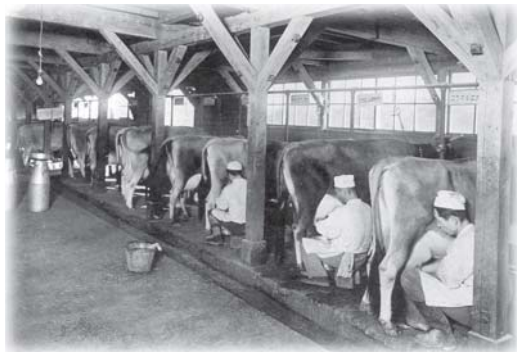


邦太郎は日本の牧畜をさらに盛んにするために、たくさん乳の出る牛の改良が重要だと考えた。

●乳牛の改良

一九〇五（明治38）年邦太郎は農商務省の依頼を受け、弟とともにアメリカへ渡り、ジャージー牛など四五頭を買い入れた。牛は汽車や汽船を乗り継いで横浜まで運び、御代田駅から神津牧場までは歩いて運んできた。牛の代金や運賃に多くのお金を使ったので、牛市を毎年開いて、飼っていた牛一二〇頭を売った。これらの牛は長野県や群馬県ばかりでなく、日本の各地で飼われるようになり、邦太郎の願いが広がった。

邦太郎は新しいバター工場をつくり、アメリカから最新式の機械を導入したため、「外国のバターと比べても勝る」と試験官を驚かせた。勧業博覧会や共進会では、邦太郎のバターや牛が一等賞を受け、宮内省でも神津バターを買い上げた。政府は邦太郎の牧畜やバターの生産による功績に対して、緑綬褒章をおくった。

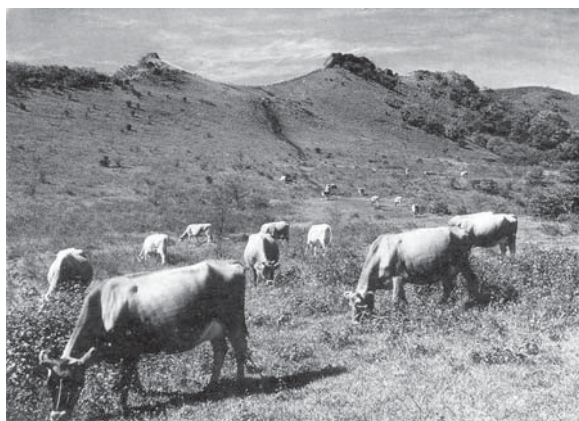


搾乳風景（神津牧場提供）

●苦しい牧場経営

神津牧場は、物見山の東斜面に広がる牧草地に牛が群れ、スイスのアルプスを想わせる美しい風景をつくり出した。一九一三（大正2）年には、牛の数が三一頭、生まれた子牛五七頭、売った牛四七頭、バター売り上げ一五五〇〇斤（一斤は一六〇グラム）と、日本でも指折りの牧場となり、「緑の草を牛に食べさせて、栄養の高い蛋白質をつくり、日本人の体を立派にしよう」という邦太郎の願いは達せられたかにみえた。

しかし、バターの生産は年々のびだが、売上高はそれほど上がらなかった。それは外国の広い牧場でたくさんつくられるバターは、神津バターより安かったからであった。また神津牧場は山の斜面にあったので、草を刈ったり干したりするのは人手がかり、支払うお金のほうが、収入を上回るようになった。多い年に



放牧風景（神津牧場提供）

は四〇〇〇円以上の赤字となり、佐久銀行からの借金は増えるばかりであった。

この様子を見ていた神津家の人々は「このまま牧場を続けると、家の財産を減らすことになる」と、牧場を続けることに反対した。邦太郎はそのことばに従って、やむなく牧場を売ることにした。

神津牧場は一九二一（大正10）年に銀行家の田中銀之助によつて三万円で購入され、佐久銀行からの借金を返した。働いていた人々は、新たな支配人のもとで邦太郎の意志をついで牧場を続けることになった。牧場の経営以外に邦太郎は、佐久銀行や長野農工銀行の重役のほか、志賀村の村長、北佐久郡議会議員として、人々のために力をつくし、一九三〇（昭和5）年に八四歳で亡くなった。その後、明治製菓（現明治乳業）を経て財団法人神津牧場の経営となった牧場の一角には、邦太郎の胸像が建てられ、牛たちや訪れる人々を今も見守っている。

（小林収）

参考文献

神津牧場百年史編纂委員会『神津牧場百年史』神津牧場
小林収「神津邦太郎による神津牧場の開設」『千曲』

東信史学会

肖像写真提供

神津牧場

佐久の先人たち⑤

西洋式牧場をつくった

こう づ くに た ろ う

神津邦太郎

(1865～1930年)



明治の世に入ってヨーロッパから多くの食べ物が入ってきた。神津邦太郎は田や畑にならない山の斜面を利用して、牧草を育て乳牛を飼い、バターをつかって日本人の体力を向上させようと願った。

●日本の農業に牧畜を

神津邦太郎は一八六五（慶応元）年に志賀村（現佐久市志賀）の本郷に生まれた。神津家は佐久地方では指折りの財産家だったので、邦太郎は村の小学校である志仁学校を卒業すると、東京へ出て福沢諭吉の慶應義塾に入った。

在学中に英語や西洋から入ってきた新しい学問を身につけると、中国の上海に留学し、貿易の方法や西洋人の生活を学んだ。この頃から彼は稲づくりと蚕を中心とした日本の農業に牧畜を取り入れ、日本人々に

栄養のある牛乳やバターを食べさせたいと考えるようになった。

明治の世に変わると、政府や県庁では、新しい産業や文化に力を入れようとしていた。

邦太郎は一八八七（明治20）年五月、長野県庁の助けをえて、西洋から輸入された牝牛と牝牛三六頭を横浜で買入れ、志賀村の東に広がる原野に放牧した。

しかし多くの牛たちが食べる草が足りないのに、県境を越えた群馬県西牧村（現下仁田町）の国有林を借りて、広い牧場を開くことを計画した。



昭和初期の神津牧場中央農区全景（神津牧場提供）

この土地は物見山（一三七五）の東斜面にある四八〇畝の原野で、木や草が生いしげっていた。邦太郎と仲間たちは、木を切り倒して牛舎をつくり、十二月には牛たちを移して、物見山神津牧場と名づけた。翌年からは千葉県の牧場やアメリカから、ジャージーなどの種牛四頭を買入れて牛を増やし、ゆるやかな畑には牛の餌となる牧草や麦を育てた。

●バターづくりをはじめ

一八八九（明治22）年の春には十一頭の子牛が生まれ、牛乳しぼりがはじまった。たくさんの牛乳は機械を使い、その頃は乳油と呼ばれていたバターに加工された。はじめはおいしいバターができなかったが、アメリカ人技術者の教えをつけ、遠心分離器を使うことにより、味の良いバターができるようになった。

明治初期の日本人は、牛乳を飲んだりバターを食べたりする人が少なかったので、邦太郎はつくったバターを東京の食料品店や料理店に売りこんだ。この時恩師であった福沢諭吉が「神津バター」を好んで食べ、まわりの人々や料理店にすすめてくれたことが大きな助けとなった。

多くの牛を買入れ、畜舎をつくり、バターの機械を買い入れるための二万五〇〇〇円は、父の国助が出してくれたので、牧場の収支は黒字をみるようになった。